フィクションの女性考古学者序論

下　垣　仁　志

1　問題の所在

「考古学は男のロマン」

20年ほど前、社会人向けのスクーリング講義を担当したさいに、「考古学のイメージ」を書いてもらうアンケートをとった。その回答に冒頭のような考古学像がちらほらあった。考古学には、野外性・探険性・冒険性・危険性などの、いわゆる男性的イメージがつきまとう。一攫千金の射倖性の印象も根強い。なるほど20世紀前半までの植民地時代の考古学的活動には、そのような側面もあっただろう。しかし、少なくとも現代日本における考古学的活動にそんな「ロマン」などない。むしろ、マスコミ主導で「危険」な「ロマン」が再生産されている風潮すらある[1)]。

そうした「ロマン」の再生産は、フィクション作品にひときわ顕著である。考古学と社会との連繋性を重視する近年の動向〔松田他2012、櫻井2023等〕からすると、フィクション作品における考古学（者）の多出は歓迎すべき状況であろう。けれどもフィクション作品は、大衆的性格を濃密にそなえるゆえに、事実よりも同時代的な興味関心が優先される。その結果、受容者の要求に応じる形で誇張や虚偽が横行し、フィクションだからとそれが許容されてしまう。そのうえフィクションには多作性が要求されるため、リサーチがはなはだ甘く、手軽に入手でき一般受けもよい「トンデモ本」や通俗書、陰謀論や俗説を鵜呑みにして、ストーリーや設定、キャラクター造形が拙速につくられる。そうした作品は相互の参照性がすこぶる大きく、とりわけ「売れた」作品の設定が安易に模倣され流用される。このようにして、実態からひどく乖離した考古学（者）像が形成され、増幅されて世間に広まってしまう。こうなるとフィクション作品は、考古学にとって益よりも害のほうがはるかに大きくなりかねない。

そこで本論では、日本国内のフィクション作品に登場する女性考古学者をとりあげ、如上の問題にいささかなりとも応答しようと思う。日本の考古学職に女性が少ないことが問題視されてから久しい〔松本他1999等〕。現在でも、男女比がほぼ同等であるヨーロッパ諸国にくらべ、日本は明らかに女性の比率が低い〔岡村2011等〕。その要因はさまざまに絡みあっているが、その一端は世間における考古学（者）像にもあると思われる。

多くの一般イメージと同様に、フィクション作品は考古学（者）の一般イメージの普及に格別の役割をになっている。実際、フィクション作品には考古学者が驚くほど頻繁に登場する〔下垣2010・2024、櫻井2014・2021、絹畠2022等〕。しかし、その実態を検討すれば、脳天気に喜んでなどいられないことに気づく。実地の考古学にたずさわる者が、異議と違和感を率直に表明し、彼我の関係を健全にしてゆくことこそ、「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて、両者の関係を実践を通して改善する試み」であるパブリック考古学〔松田他2012〕の正当な実践であるはずだ[2)]。とはいえ、このテーマは女性考古学者のみに収斂させうるものではなく、射程がすこぶる広く深い。それゆえ、本論は要点の簡説にとどめたい。「序論」と題するゆえんである。

2　検討の対象と資料

本論の基礎資料として、筆者が作成した『フィクションの考古学者集成』を使用する〔下垣2024〕。本集成は、2023 ～ 24 年度の日本学術振興会科学研究費補助金の挑戦的研究（萌芽）「メディア文化研究における研究データ蓄積・共有環境のモデル構築[3)]」（研究代表者 喜多千草）の基礎分析資料を冊子化したものである。集成対象はおもに小説およびマンガに登場する考古学（関係）者であり、データの統一性と一貫性を保持するために、紙媒体（書籍）に登場する考古学者に限定した。アニメ・映画・ゲーム・特撮などの映像作品にも考古学者は頻出するが、いま述べた理由から紙媒体の事例のみをあつかった。

書籍単位で集成する方針をとったため、同じ考古学者が複数の書籍にまたがって登場する場合が頻出する。他方、『王家の紋章』（マンガ、1977 年[4)] ～）のキャロル・リードや『ONE PIECE』（マンガ、1997 年～）のニコ・ロビンのように、三桁にせまる巻数に登場していても、考古学にかかわる発言や活動がみとめられない巻は除外している。また、小説のマンガ化や映画の小説化などのように、メディアを横断してあらわれる考古学者は、各メディアごとに 1 件として計上した。

このように曖昧さが残るが、本書で集成した考古学者は約 5080 件におよぶ。複数巻にまたがる同一の考古学者がいる一方で、複数人ないし多人数が「考古学者たち」と一括される事例も少なくないので、正確な人数は算出できない。一括して描写される氏名不明の考古学者群をいかに集計するかで、総人数は大きく変動する。大人数の端役の考古学者がすべて男性であったり、あるいは全滅する事態が生じている場合、端役の動向が全体の統計に大きな影響をおよぼし、主役・準主役および脇役の描写が基軸になるべき全体像を歪めてしまう。それゆえ、作中の考古学者群は便宜的に 1 人とみなしておくのが穏当である。この基準で集計すると約 3750 人になる。なお、人数が判明する端役の考古学者群を忠実に数えあげ、人数の判明しない場合の複数人を便宜的に 2 人、多人数を 5 人に換算して総計すると、およそ 5400 人になる。

本書の刊行後も集成を継続しており、100 件あまり増補している。そこで本論では、増補版のデータを使用する。なお本集成でとりあげ、本論で対象にする「考古学者」は、現実の考古学者とかならずしも合致しない。作者が古生物学者や文献史学者を考古学者と勘違いしている場合や、古代史研究者や言語学者が考古学者のように描写される場合が散見する。また、考古学専攻生や発掘参加者を考古学者と認定してよいかという問題も残る。本集成および本論では、現実の考古学者との属性の一致にこだわらず、幅広い考古学（関係）者を対象にした。ただ、逐一「考古学（関係）者」と記すと煩瑣になるので、以下では幅広い考古学（関係）者をたんに考古学者と記す。

本書の集成データは、「出典」「形式」「ジャンル」「内容紹介」「考古学（関係）者」「役割」「職位・身分等」「性別」「年齢」「外見・容貌」「属性・描写等」「処遇」「舞台」「備考」の項目にわけて情報を記載した。それらのデータが本論の分析および検討の基礎になる。本論で触れる内容は、おおむね本書の各項目に記載している。

本書は科学研究費成果報告書として複数の大学図書館に寄贈したが、CiNii で検索するかぎり、半分ほどしか受領されなかったようである。社会と学問の連携が高唱されるのとは裏腹に、この手の研究はいまだ際物あつかいされているようだ[5)]。そのため、本書は閲覧が容易でないが、一部のデータ（「出典」「形式」「ジャンル」「考古学（関係）者」「役割」「職位・身分等」「性別」「年齢」「舞台」）を京

都大学学術情報リポジトリ（KURENAI 紅）において公開している[6]。刊行データの 3 割ほどの情報量だが、本論を確認・検証するうえでそれなりに有用であるので、関心のある方は参照されたい。煩瑣を避けるため、本論で考古学者が描写される書籍に触れる場合、上記のように書籍名・形式・刊行年次のみを記すにとどめる。詳細は本集成で確認されたい。

3　概況

大衆文化（ポピュラー・カルチャー）における考古学者像を多面的に分析した櫻井準也氏は、日本のフィクション作品における女性考古学者像の特徴と推移を以下のようにまとめている。国外だと 1980 年代から 90 年代を女性考古学者の「黎明期」と位置づけることができ、それ以降に女性考古学者の登場する海外映画作品が急増する。それと対照的に、80 年代から 90 年代の日本の映画作品には女性考古学者が登場せず、テレビドラマでも「僅かな作品に登場するに過ぎない」。これは、「女性研究者の地位や研究環境」の面で、日本考古学が「アメリカなどと比較」して「まだまだ後進」的である状況の反映かもしれない。他方で、80 年代以降のフィクション作品における考古学者像の「多様化」と連動し、アニメやマンガに女性考古学者が登場するようになった〔櫻井 2014・2021〕。

櫻井氏は映画などの映像メディアを重視している。他方で本論は、書籍情報に焦点をあてている。そのため、抽出される現象は厳密に合致しないかもしれないが、櫻井氏の整理を導きの糸として、女性考古学者の推移をあらためて概観してみよう。

『フィクションの考古学者集成』に掲載した考古学者のうち、女性と男性の件数[7]（延べ人数）を 10 年ごとに計上した表を作成した（**表 1**）。男女を計数するさいに、国内作品と翻訳作品（国外作品）

表 1　女性考古学者と男性考古学者の推移

	女性考古学者				男性考古学者				女性率	国内作品女性率
	国内作品		翻訳作品		国内作品		翻訳作品			
	主役・準主役	脇役	主役・準主役	脇役	主役・準主役	脇役	主役・準主役	脇役		
～ 1950 年	0	1	0	0	8	27	3	9	0.02	0.03
1950 年代	0	0	0	0	9	20	1	6	0.00	0.00
1960 年代	0	3	1	3	13	23	5	19	0.10	0.08
1970 年代	4	2	0	4	11	71	12	45	0.07	0.07
1980 年代	13	27	9	22	33	139	36	95	0.19	0.19
1990 年代	23	40	24	30	95	295	48	113	0.18	0.14
2000 年代	11	78	50	70	117	350	71	208	0.22	0.16
2010 年代	63	103	84	74	83	336	58	225	0.32	0.28
2020 年代	23	57	10	9	45	129	19	28	0.31	0.32

＊複数巻に登場する考古学者が多いので、数字は延べ人数（件数）。
＊主役・準主役と脇役の認定は〔下垣 2024〕による。端役は割愛する。
＊翻訳作品のマンガ版は翻訳作品としてあつかう。
＊書籍として刊行された年次を基本とするが、全集など初出から書籍化までの期間が長大な場合は初出の年次を優先する。翻訳作品は原著ではなく訳書の刊行年次を採る。
＊「女性率」は女性総数÷総数。100 を掛けるとパーセントになる。

とに二分し、さらにそれぞれを主役および準主役と脇役とにわけた。端役を除外したので、総件数は3650件ていどになる。端役をくわえると、以下の数値はさらに増える。小説やマンガのような大衆的作品は、売れ筋や流行に敏感に反応しつつ隆替する。作品が露骨なほど相互参照的な関係をもちつつ、ジャンル固有の特徴が形成されたり、ニッチ的なサブジャンルが形成されたりする。そのような作品横断的な動向をとらえるには、相互参照性の強い国内作品と、それを分断する形で流入し、新たな影響をおよぼす翻訳作品[8]とを区別して考察するのが望ましい。

表1によると、1970年代まで女性考古学者の件数は、国内作品と翻訳作品とを問わずきわめて少ない。総件数に占める女性考古学者の割合は0～10パーセントにすぎない。しかし、80年代には20パーセント前後になり、2010年代以降は30パーセント前後まで上昇する。件数の伸びにも目をみはるものがある。わずか10件であった70年代から、71件（80年代）→117件（90年代）→209件（2000年代）→324件（10年代）のごとく、古い作品ほど修正漏れが生じることを勘案しても、まさに鰻のぼりである。櫻井氏の指摘よりも早い時期から、女性考古学者が存在感を高めている状況がうかがえる。また櫻井氏は、女性考古学者の出現頻度における国外作品の先行性を説くが、少なくとも小説やマンガなどの書籍作品における女性考古学者は、その件数と総件数に占める割合との面で、国内作品と翻訳作品が同調性を示していることも看取できる[9]。

4　特徴と背景

女性／男性の対照性

以上のように、フィクションにえがかれる女性考古学者は、男性考古学者にたいする量比の面でも、件数の面でも、時を追って順調に増加している。とりわけ翻訳作品における主役・準主役の考古学者は、女性が男性に比肩もしくは凌駕するにいたっている。しかし、この現象をただちに、フィクション作品における女性考古学者の地位向上に結びつけるわけにはゆかない。ましてや、現実の女性考古学者の活躍ぶりの反映を、あるいは明るい未来の予兆を、安易に読みとることもできない。なるほど女性考古学者の登場頻度が絶無に近かった1970年代以前にくらべれば、状況は俄然よくなっている。しかし、諸作品における女性考古学者の役割や位置づけ、機能や描写を細かく読み解いてゆくと、楽観的な評価はできないことが判然としてくる。以下、この論点を軸にすえて考察する。

表1をみるかぎり、女性考古学者は増加の一途をたどっている。ところが細部まで注意すると、本格的な考古学者はごく一部にすぎず、学生の考古学専攻生や考古学者を夢みる生徒、あるいは考古学マニアの社会人などがかなりの比重を占めている。本格的な考古学者が割合に多い男性とは対照的である。たとえば先述のキャロル・リードは、カイロ学園高等部で考古学を学ぶ16歳の生徒であり、1970～80年代の国内作品に登場する女性考古学者計17件のうち13件を1人で稼いでいる。

この状況は、女性考古学者の年齢が男性考古学者に比して有意に若いことと相関しているようだ。男性の考古学者は年配者が相対的に多く、若者から老人まで満遍なく登場する。それにたいして、女性の場合だと10代～20代の割合がかなり高く、40代以上は顕著に少ない。女性考古学者のうち40代以上、もしくは中年や年配や老人などと表記されているのは、わずか10パーセントに

すぎない。同じ年齢幅の男性考古学者は50パーセント超なので、その対極ぶりがいちじるしい。それにもかかわらず、女性考古学者の才能にあふれた活躍ぶりを作中で強調するせいで、20代にして世界的な考古学者として名声を博していたり、20代〜30代前半で教授になっていたりと、非常識な設定や描写が続出する。その無理を糊塗するためか、無能な年配男性考古学者からの迫害とハラスメントがやたらと強調されることになる。

考古学者のイメージの定番である、冒険性と危険性の高い発掘作業に、女性考古学者があまり従事しないことも注意される。他方で、堪能な語学力と古文書の解読能力とが、しばしば強調される。上述のニコ・ロビンやキャロル・リードはその典型である。後述のハーレクイン・ロマンスでは、室内での整理作業、とりわけ目録づくりに従事する女性が目だつ。発掘作業を手がけないわけではないが、検出作業や図面とりに比重がおかれ、男性考古学者にくらべると肉体労働への関与が稀薄である。発掘作業に従事する場合も、冒頭だけのことが多く、いきなりアラブのシークや盗賊に拉致されるなどして調査が中断し、あとは恋愛三昧の展開が頻出する。

『トゥーム・レイダー』（ゲーム・映画・小説、1996年）のララ・クロフトのように、冒険的なアクションが強調される女性考古学者もいるが、そうした場合は肉体的な労働活動ではなく、総じて官能的な肉体美が全面に押しだされる。つまり、古い言い回しだが「3K」（きつい・汚い・危険）から女性考古学者が意図的に遠ざけられているわけだ。このことに関連して、近年では水中考古学に従事する女性考古学者がにわかに増えている。土砂と汗にまみれる地上の発掘にたいして、水中調査には青く澄んだ海中というクリーンなイメージがあり、しかも女性考古学者に水着をまとわせ読者にアピールできる[10] 作劇上のメリットに起因するところが大きいのではなかろうか。

官能的な肉体美とあいまって、女性考古学者が容姿端麗に描写される場合が非常に多いことも指摘しておかねばならない。その一方で、男性考古学者の容貌は醜悪にえがかれることが少なくない。女性考古学者と対立的な関係にある男性考古学者だと、醜怪ぶりがとりわけ露骨に示される。女性考古学者＝美人・若い・清廉・有能／男性考古学者＝醜悪・年配・陋劣・無能という安直な二項対立が、女性考古学者にたいする読者の同情と共感を引きだし、作中での活躍を引きたたせる筋書きが頻繁にみとめられるのである。

美人で若くて有能なのに（頑迷固陋な男社会のせいで）不遇だという、女性考古学者に多出する設定は、当該女性の学問的主張を正当化させる効果をしばしば生みだす。要するに、作者が作中で推したい「トンデモ」な学説を、若い美貌の女性考古学者に唱えさせ、定説に固執する権威主義の男性考古学者から囂々たる批難を浴びせることで、読者の同情を当該学説への共感へと転化させる作劇上の手管である。この手管は、国内作品と翻訳作品とを問わず頻見するが、ひときわ露骨なのがクライブ・カッスラーの一連の作品である。

カッスラーは「百万部単位で売れる人気」を誇る押しも押されぬ冒険アクションの大家である〔カッスラー 1988〕。考古学者が登場するカッスラー作品の邦訳は40数冊にのぼり、作中では女性考古学者の活躍が華々しい[11]。そして、マヤ文明はヨーロッパ文明の影響下で成立しただの、エクアドルのような「僻遠」の地に高度な文明は独自に発展しえないだのといった奇説を、ヒロイン役の女性考古学者などに唱えさせ、作中でそれを裏づける発見がご都合主義的になされ、女性考古学者を批難していた頑迷な男性考古学者たちが面目を失う展開が顕著にみられる。このような奇説は、西洋以外の文明の固有性を否定し、その創造性の源泉を外部に帰せしめる点で、欧米による「時代

を超えた人種差別主義」を内包していることが問題視されている〔ジェイムズ他 2002、フィーダー 2009 等〕。つまり、ベストセラー作家が長年にわたって、読者の同情と共感を引く見目麗しい若い女性考古学者を出汁にして、「人種差別」的な古代史像を拡散しているわけだ[12)]。

死なない女性、死ぬ男性

フィクションにおける男女の考古学者の対照性は、作中での処遇にも色濃く滲みでている。例外も多々あるが、少なからぬ男性考古学者が欲に駆られて失態を犯し、凋落する一方で、（若い）女性考古学者は首尾よく成功をおさめ、名誉と地位を手にする。発掘や研究などにさいして不法行為に手を染める場合、男性考古学者だと天網恢々とばかりに破滅することが多いが、女性考古学者はお咎めなしが基本である。事故や暴力に巻きこまれる場合も、男性考古学者にくらべ女性考古学者は些少な被害ですむのが定番である。

フィクション上の考古学者は、かなりの頻度で危機に遭遇し、肉体を毀傷し、しばしば命を落とす[13)]〔櫻井 2014〕。いささか不穏だが、男女別の死亡率を算出してみた。同一人物が複数の書籍にまたがる場合は 1 人、複数名がまとめて描写される端役の考古学者群も 1 人として計上した場合、作中で死亡する（死亡していた）考古学者は約 950 人にのぼる。同じ基準で集計した考古学者の総数は約 3750 人なので、死亡率は約 25 パーセントになる。当然ながら、ホラーなどの人死にが強調されるジャンルをのぞくと、主役・準主役は滅多なことでは死なない。そこで脇役と端役に限定すると、死亡率は 30 パーセント弱になる[14)]。

主役・準主役、脇役、端役をあわせた男女の死亡者の割合を百分比で示すと、女性 13：男性 87 になる。**表 1** に示した考古学者の総数の男女比が女性 23：男性 77 であるので、男性の死亡率が有意に高い。男性の考古学者陣が陸続と失命するのをよそに、女性考古学者が無傷のまま栄誉を手にする展開は、フィクション世界ではありふれた光景である。死なないまでも、男性考古学者が危険にさらされる場合、骨折や全身打撲は当たり前、部位欠損や再起不能などといった目に遭うことも少なくない。他方で女性考古学者だと、貞操の危険に遭うことが多い（たいてい未遂で終わる）が、あとは軽度の殴打か軽傷ですむ場合が大半である。

興味深いことに、男性が老若を問わず命を落とすのとは対照的に、女性は 40 歳（ないし中年）以上の死亡率が明らかに高く、女性死亡者の 30 パーセントをこえる。上述のように、この年齢幅の女性考古学者の割合は 10 パーセントなのだから、女性考古学者は加齢にともない作中で死にやすくなるわけだ。こうして、若い女性考古学者の活躍を横目に、男性考古学者が続々と落命し、年配女性も消し去られるストーリーが紡ぎだされることになる[15)]。

女性考古学者の死亡例の内訳を分析すると、示唆に富む傾向があらわれる。まず、（A）夫婦ともども死亡している事例が目だち、全体の 20 パーセント強を占める。それらは主役もしくは主要人物の母親であり、父親が同時に死亡していない事例までふくめると、全体の 30 パーセントにのぼる。物語の開始時点ですでに故人であるケースが、物語の進行中に死亡するケースに比肩するほど多い。第二に、（B）フィクション上の女性考古学者としては高年齢である 40 歳以上での死亡例が顕著である。第三に、（C）不美人と明記される人物が作中で比較的よく落命する。死亡事例のうち、美人／不美人が作中で描写されている事例を百分比で示すと、美人 87：不美人 13 となる。フィクションの女性考古学者はおおむね美人に設定されており、圧倒的に少数派である不美人

が死亡者にこれほど多いのは注目に値する。以上の（A）～（C）で死亡例の半数をこえることになる。さらに（D）主役サイドの敵や裏切り者、（E）殺人犯、（F）ホラー作品やサスペンス作品やミステリ作品における死亡事例、も散見する。（D）～（F）は全事例の40パーセント強を占め、（A）～（F）に該当しない事例は全体の20パーセントしか残らない[16]。なお、（A）～（F）はしばしば重複する。

なぜこのような数値上のかたよりが生じるのだろうか。（D）～（F）は物語の構成上、女性が死亡しても特段の違和感がないから、とりあえず脇においてよい。では、（A）～（C）の頻度が高いのはなぜだろうか。これら3つに共通するのは、若く美しい未婚女性に比しての性的訴求力（アピール）の減衰である。すでに正式な性的パートナーがいて子をなしていたり（A）、女性の性的魅力と直結されがちな若さおよびすぐれた容貌が欠如していること（B）（C）は、作中で新たに性的な結びつきが発生することへの読者の期待度を低下させる。フィクション作品の女性考古学者のあつかいには、〈若くて美人で未婚でなければ死んでもかまわない〉と言わんばかりの志向が潜在しているのである。

役割のかたより—ハーレクイン・ロマンスとその周辺—

フィクションにおける女性考古学者の数値上の増加が、内実を十分に反映していないことを先述した。この私見を、作中での役割（主役・準主役、脇役、端役）の面から補強したい。**表1**をみると、脇役にたいする主役・準主役の件数比が、男性考古学者よりも女性考古学者のほうがいちじるしく高いことが明白である。

女性／男性の主役・準主役と脇役および端役の割合の不均衡性を示す、さらに具体的なデータをとりあげよう。すなわちハーレクイン・ロマンスの作品（以下、ハーレクイン作品）である。これは女性向けのラブロマンス小説であり、世界114か国で販売され、累計販売数は70億冊弱、日本国内でも年間400冊が刊行される巨大出版ジャンルである[17]〔尾崎2019〕。内容は大同小異であり、若い女性が資産と地位と名誉を兼ね備えた美形の高身長男性に見初められ、紆余曲折の末に結ばれる御都合主義のシンデレラ・ストーリーである。その翻訳作品を博捜すると、考古学者は120作品ほどに登場する。そのマンガ版の刊行もさかんで、考古学者は約50作品にみとめられる。さらに、ハーレクイン作品の長尺版とみなせる作品群が、扶桑社ロマンス、ラズベリーブックス、ライムブックス、ラベンダーブックス、ヴィレッジブックス、二見文庫などのレーベルから出版されており、30作品以上で考古学者が活躍する。ハーレクイン作品に類するこれらの作品群を、ハーレクイン系作品と仮称しておく。また両者をハーレクイン（系）作品と総称しよう。

これらハーレクイン（系）作品は、女性考古学者の宝庫と評してよく、翻訳作品にあらわれる主役・準主役、脇役の女性考古学者の35パーセントを占めている。主役・準主役にかぎると、実に50パーセント超になる。ハーレクイン（系）作品を抜きにして、フィクションの女性考古学者像を論じることは至難とさえいえよう。そこでまず、ハーレクイン（系）の諸作品に登場する考古学者を、男女別に主役・準主役、脇役、端役にわりふって集計すると、やはり主役・準主役の占める割合が、男性に比して有意に高い状況が明白にみとめられる（**表2**）。なお、ハーレクイン（系）の作品では、原則として女性が主役（ヒロイン）、つがいになる男性が準主役（ヒーロー）である。つまり、登場人物数に占める主役率は女性が男性を圧しているわけだ。他方で、脇役と端役の件数だ

表２　ハーレクイン（系）作品の考古学者

	ハーレクイン作品				ハーレクイン系作品			
	作品数	主役・準主役	脇役	端役	作品数	主役・準主役	脇役	端役
女 性	171	77	29	34	34	23	7	8
男 性		50	92	88		10	48	25

＊「作品数」は考古学者の登場する書籍の冊数。
＊考古学者は延べ人数（件数）。
＊主役・準主役、脇役、端役の認定は〔下垣 2024〕による。
＊端役の考古学者はしばしば複数人が一括されるが、そうした人数不詳の場合は１件としてあつかう。

と、ハーレクイン作品では男性が女性の３倍、ハーレクイン（系）作品では５倍にもおよぶ。

このように、フィクション作品をつうじて、主役・準主役に占める女性考古学者の割合が男性考古学者に比して相対的に高い一方、脇役と端役になると一転して低くなる状況がみてとれる。この状況は、女性主人公に考古学者という属性をあえて付与する作者の意図が、男性主人公の場合よりも明確であることを強く示唆する。そして他方で、そのような意図が稀薄になる脇役と端役が圧倒的に男性主体であるのは、作者が考古学を男性中心社会だと認識していることを、はからずも露呈させているといえよう。

主役・準主役に女性考古学者を抜擢することには物語上の効果もある。たとえば、若い身空で黴臭い古物や泥臭い出土品を愛好する変わり者という印象をあたえうる。実際、個性あふれる変わり者であることが作中で強調される女性考古学者はすこぶる多い。周囲に流されず自分の生きざまを貫く人物として好意的に描写されることも目だつ。ただし、個性的なキャラクターを引きたたせるべく「考古学」が都合よく利用されるため、往々にして上滑りの人物造形になる。くわえて、脇役や端役が男性陣でかためられる結果、男性社会での差別に苦しみながら考古学に邁進する女性を演出でき、読者の共感に訴えることも可能になる。ともあれ、女性考古学者の活躍を主役クラスに収斂させる結果、多くのフィクション作品が、はからずも考古学の男性中心性を強調し再生産する役割をはたしていることには注意しておいてよい。

女性考古学者の自立性

フィクションの主要登場人物に女性考古学者を抜擢して活躍させる結果、男性中心の考古学界像を強調し再生産してしまう皮肉な事態を指摘したわけだが、この問題をもう少し深掘りしておきたい。フィクションの女性考古学者は、しばしば男性への依存性がきわめて高い。ハーレクイン（系）作品にとりわけ顕著なのだが、女性の自立した学問的姿勢が作中で強調されるのとは裏腹に、調査のお膳立てや心身にわたる援助、調査地での肉体労働や危険からの保護を、男性が甲斐甲斐しくつとめるパターン[18]が頻見する。功に逸った女性の割を食って死亡したり破滅する男性が頻出するが、原因となった当の女性は気づきも悪びれもしないケースも目につく。さらにまた、男性との恋愛関係が物語の軸になっていたり、父親との関係や同僚男性との関係が前面に押しだされることも実に多い。他方、女性考古学者間のつながりは総じて稀薄である。女性不在の活動が散見し、同性間の（非性的）関係が重んじられがちな男性考古学者とは対極的な特質である。

要するに、作中で自立しているかのように描写される女性考古学者の目的なり活動なりは、男性との関係を軸にして展開されがちなわけだ。もちろん、これに該当しない女性考古学者も少なくない。しかし、女性との関係から比較的自由な男性考古学者の活動ぶりと対比すると、男性ありきの物語構造内に配備されがちな女性考古学者の特質がはっきり浮かびあがる。本論において男性考古学者と対比する形で女性考古学者の描写状況を分析したのは、このような理由ゆえである。

かつて筆者は、X 軸＝社会への埋没度と Y 軸＝物語進行上の機能との 2 軸を掛けあわせた 4 象限モデルにより、フィクション作品の考古学者をⅠ型（タツオ型）＝脱俗（脱世俗）／物語参入型、Ⅱ型（キートン型）＝超俗（脱凡俗）／物語参入型、Ⅲ型（ジョナサン型）＝超俗（脱凡俗）／アイテム導入型、Ⅳ型（藤隆型）＝脱俗（脱世俗）／アイテム導入型に分類した〔下垣 2010〕。この理念型的な分類を提示したころから、考古学者の集成数が一桁ふえたが、少なくとも男性考古学者の主役～脇役には依然としてこの分類が有効と思われる[19]。というのも、アイテムに振り回されはするが、男性考古学者は基本的に物語に自立的に参入してゆく傾向が強いからである。ところが、少なからぬ女性考古学者は、この分類に整然と配分しづらいきらいがある。むしろ、X 軸＝男性からの庇護の多寡（自立度）、Y 軸＝考古学的活動への参与度、の 2 軸による分類にうまく当てはまりそうだ。いささか嫌味な分類基準になってしまうが、物語構造がそうなっているのだから仕方がない。

5　課題と展望

本論ではフィクション作品にえがかれる女性考古学者を検討の俎上に載せ、その特質と背景を探った。この数十年、フィクション中の女性考古学者は順調に増加し、一見すると現実の考古学界における女性考古学者の増加や活躍の追い風になるようにも思われるが、そう単純な話ではなく、むしろ悪影響をおよぼす側面が多々あることをデータに即して明示した。

虚構の話にわざわざ目くじらをたてる必要などない、という見方もあるだろう。フィクションの描写を変えたところで現実は揺らがない、という考えもあるだろう。しかし、そうした見方にははっきり異議を唱えておきたい。2010 年代から、「なろう系」と総称される異世界転生系の一ジャンルが日本のフィクション界を席捲しているが、考古学者が 30 数冊に登場し、そのほかにも古代遺跡や太古のアイテムが頻繁にえがかれるなど、考古学との接点が少なくない。まことに浅ましい作品群であるが、それらが広く受容される社会状況や世相をかえりみずにあげつらっても意味がない。本論で具体的にとりあげたハーレクイン（系）作品にしても、「現代の結婚制度の下」で「常に他人の面倒を見る立場に置かれ」て「疲れた女性にとっての駆け込み寺」〔尾崎 2019〕としての効能がある以上、そうした背景を捨象して女性考古学者の設定や描写の不合理を批難しても仕方がない。

とはいえ、現実と乖離した考古学者像が執拗に再生産されることで、現実の考古学者にたいする誤った認識が広まる危険性があるし、若者の進路選択に影響をおよぼしうることも厳然たる事実である。発信力の面で大衆作品が専門の考古学者の著作物をはるかに凌駕する以上、考古学サイドとしては座視していられないはずである。フィクションの主要登場人物が作中で奇説を唱え、大発見の末に晴れて実証され、斯界の権威連中の鼻が明かされる展開は、読者に心地よく受けいれられるだろう。老醜をさらす男性の権威に虐げられたうら若い女性考古学者が提唱する斬新な仮説は、た

とえその実態が事実無根の「トンデモ説」であっても、「時代を超えた人種差別主義」であっても、気づかれることなく正当な事実として読者に受けいれられてしまう。そのような偽史的言説は、しばしば政治面で悪用され、社会に蔓延してしまうことはよく知られた事実である。だからこそ、「如何に興味をそそるものであろうとも、それがいつわりのものだと明確にしておく“毒抜き”のプロセス」〔佐伯 2007〕を経由させることが、専門家としての社会的責務になる。

本論で指摘したように、若く美しい女性考古学者の活躍が特記されるフィクションの状況は、そうした要素を欠く女性が考古学者としてふさわしくないという言外の価値観を背在させている。そして、作中で少数の若く美しい女性考古学者を活躍させることに意を注ぐあまり、脇役や端役は男性で占められがちになり、そのような男性が主体をなす考古学界像が世間へと発信されることになる[20)]。こうなると、現実の考古学界のジェンダー問題に悪影響をあたえかねない。

以上、フィクションにえがかれる女性考古学者の分析をつうじて、フィクションの作者が気づかずにはまる陥穽ともいえる問題点を指摘した。今後、専門家からの建設的な指摘をつうじて、よりよい創作が生みだされることを期待したい。また、近年のフィクション作品における女性考古学者の躍進ぶりをみるに、その目ざましい活躍の描写をあるべき理想と思いこみ、現実の考古学界になにかしらの提言をする粗忽者が早晩でてくるかもしれない。本論は、そんな折の解毒剤になればと思う。

註

1）最近、現役の日本人考古学者が「海外の考古学調査を行う中で体験した、日々の恐怖・驚愕・奇々怪々の類」を大仰に書きたてた書籍〔大城他 2023〕が刊行され、それなりの評判をえているようである。とはいえ、植民地時代の考古学的活動〔マスタース 1942、ツェーラム 1962 等〕の「恐怖・驚愕・奇々怪々」とはまるで比較にならない、牧歌的な海外発掘「あるある」の感が強い。

2）最近、巷間で好評を博した土偶論への批判本が話題をよんだ〔望月編 2023〕。重要な批判的作業ではあるが、考古資料を恣意的に操作した怪しげな書籍が洛陽の紙価を高める現象は、少なくとも明治期以降、執拗にくり返されてきた。これは学問の構造的な問題であり、かつ社会と学問をめぐる問題でもあり、長期的な視座から丹念に解明してゆく必要がある〔下垣 2025〕。

3）https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23K17486/（2025 年 8 月 24 日最終閲覧）

4）初出が単行本ではなく週刊誌や月刊誌などの場合、厳密を期するならばその年次を記すべきではあるが、本論では書籍化された年次を記す。ただし全集の収録作品は、初出年次を優先する。文庫化された書籍も、原著の刊行年次を採用する。翻訳作品については、日本国内での受容状況が重要なので、刊行年次は原著ではなく訳書のものとする。

5）他方、ポピュラー・カルチャーの研究者が、本集成を活用した興味深い論文を早くも発表している〔森下 2025〕。筆者も本集成を駆使しつつ、考古学界の蛸壺に逼塞しない越境性の高い研究を進めようとしているが、いかんせん機会がなかなかない。

6）URI　https://doi.org/10.57723/kds586789（2025 年 8 月 24 日最終閲覧）

7）前述したように、本集成に 100 件ほど増補したデータを使用した。

8）たとえば 1960 ～ 70 年代以降のフィクションの考古学者像には、敗戦後にアメリカから流入した SF（サイエンス・フィクション）がかなり強い影響をおよぼしている。他方、ハーレクイン・ロマンスをはじめとする女性向けラブロマンスは、これまで厖大な冊数が翻訳され〔尾崎 2019〕、ハーレクイン・シリーズの翻訳作品だけでも、登場する女性考古学者は 130 件をこえるが、BL（ボーイズ・ラブ）への影響を例外として、国内作品の女性考古学者像の造形への波及性はほとんどみとめられない。これに関しては別稿を準備中である。

9）ただし、彼我の差異を看過してはならない。登場するジャンル、ストーリー上の役割、男性（考古学者）との関係性などにおいて、かなりの相違がある。この点については、いずれ別稿で考察したい。

10）現実の水中調査は泥砂が始終舞いあがるし、危険度も相当に高い。ところがフィクション作品になると、潜水病や減圧など考慮の埒外とばかりに、まるでバカンスの延長のように調査が実施される。調査服もダイバー服

が原則のはずだが、フィクション作品ではしばしば水着姿で、しかもアクアラングすらつけないケースさえ散見する。

11）魅力的に設定された女性考古学者は、往々にして主役男性にあてがわれるヒロイン役に（あるいは濡れ場要員に）される。なぜ女性考古学者が魅力的に設定されるのか、物語構造に即して熟考する必要がある。

12）そのような西洋中心主義的な見方にたいする反省が、近年になってようやく一般まで滲透しつつある。したがって今後は、非西洋の在地文化の独自性をみとめない年配の男性考古学者の「人種差別」に敢然と立ち向かい、在地固有の文化的発展をこれみよがしに主張し称揚する女性考古学者が増えてゆくと容易に予想される。

13）まるで死神が取り憑いたようにフィクション上の考古学者が死亡してゆく理由については、詳細な考察が必要になる。仮説的に述べておくと、考古学者に付せられた冒険性や危険性という一般イメージと、1920 年代から本格化した「呪い」（による死）という広範なイメージ〔森下 2025〕、そしてクトゥルフ的な怪異による死などのイメージが融合したことが大きいと考えている。

14）なお、端役の考古学者群はしばしば全滅する（150 名ほどが死ぬ事例さえある）ので、これらを実数に近い数として算出すると、さらに死亡率がはねあがる。

15）その不自然さぶりに、翻訳者が次のような違和感を表明してしまうことさえある。ヒロインの考古学者「の設定にも不思議な点がある―なぜか一作ごとに彼女と関わった大英博物館の同僚男性が必ず一人死んでいるのだ。（中略）さすがに死にすぎである。（中略）通常なら彼女に変な噂が立ってもおかしくないところであろう」〔ベッカー 2016 の「訳者あとがき」〕。

16）さらにここから、登場人物が危険に遭いやすい「冒険」「伝奇」ジャンルにおける女性の死亡例を差し引くと、残るは 5 例ていどになる。

17）たとえば、ハーレクイン作家のダイアナ・パーマーの翻訳作品約 10 冊に考古学者が登場するが、その諸作品の累計発行部数は 2005 年の時点で 4200 万部をこえる〔パーマー 2005〕。またハーレクイン系の「ロマンスの女王」として名を馳せるノーラ・ロバーツも、翻訳作品約 10 冊で考古学者が活躍するが、総計 200 点に達する諸作品の累計発行部数は、2016 年の時点で 4 億部をこえるという〔ロバーツ 2016〕。

18）すでに 20 作に達する『遺跡発掘師は笑わない』シリーズ（小説、2011 年～）において、「発掘コーディネーター」を志望する準主役の女性にカンフーの達人という設定を付与し、発掘の天才だが精神的に幼い「発掘師」を庇護させているのは、従来にない新鮮なこころみといえる。

19）この論考は考古学と大衆文化を関連づけた早い時期の研究成果であるが、データが格段に増えた現状のデータをふまえて読み返すとかなり物足りない。いずれ一〇倍ほどの分量に増補した改稿を公表したい。

20）鈴木美潮氏は特撮のジェンダー問題に触れつつ、ヒーロー側の「紅一点」モデルにせよ、悪の組織の女幹部像にせよ、「男並みに働くことができるうえに女らしさも兼ね備えているスーパーウーマンしか、男性と平等に働くことはでき」ず、「活躍している」女性は「独身」で「若い」ものだ、という「誤った固定観念」を「多くの女子の胸に刻んでしまった」点で「罪でもあった」、と指摘する〔鈴木 2015〕。この指摘は、フィクションの女性考古学者像にもそのまま該当する。

引用文献

大城道則・芝田幸一郎・角道亮介 2023『考古学者が発掘調査をしていたら、怖い目にあった話』ポプラ社

岡村勝行 2011「私たちはどこにいるか―現代考古学の国際比較から―」『考古学研究』第 58 巻第 3 号　考古学研究会

尾崎俊介 2019『ハーレクイン・ロマンス 恋愛小説から読むアメリカ』平凡社新書 930　平凡社

絹畠　歩 2022『小説に描かれた考古学世界の理想と現実―松本清張と以後の小説―』第 22 回松本清張研究奨励事業研究報告　北九州市立松本清張記念館

クライブ・カッスラー著（中山善之訳）1988『古代ローマ船の航跡をたどれ』下　新潮文庫カ-5-12　新潮社

ケネス・L・フィーダー著（福岡洋一訳）2009『幻想の古代史』下　楽工社

佐伯　修 2007『偽史と奇書の日本史』現代書館

櫻井準也 2014『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社

櫻井準也 2021『マンガと考古学 その親密な関係を探る』六一書房

櫻井準也 2023『遺跡と現代社会』六一書房

ジェームズ・ベッカー著（荻野融訳）2016『聖なるメシアの遺産』下　クリス・ブロンソンの黙示録③　竹書房文庫ベ 1-6　竹書房

下垣仁志 2010「フィクションの考古学者」遠古登攀刊行会編『遠古登攀』真陽社

下垣仁志 2024『フィクションの考古学者集成』令和 5 年～ 6 年度科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽）研究成果

報告書　京都大学大学院文学研究科
下垣仁志 2025「特集「嘘」によせて」『史林』第 108 巻第 1 号　史学研究会
鈴木美潮 2015『昭和特撮文化概論 ヒーローたちの戦いは報われたか』集英社
ダイアナ・パーマー著（山田沙羅訳）2005『宿敵の口づけ』シルエット・ロマンス L-1160　ハーレクイン
ダヴィッド・マースタス著（高田堯夫訳）1942『古代文化発掘物語』三教書院
ツェーラム，C・W 著（村田数之亮訳）1962『神・墓・学者 考古学の物語』中央公論社
ノーラ・ロバーツ著（香山栞訳）2016『幸運の星の守り人』星の守り人トリロジー①　扶桑社ロマンス 1442　扶桑社
ピーター・ジェイムズ、ニック・ソープ著（福岡洋一訳）2002『古代文明の謎はどこまで解けたか』Ⅰ―失われた世界と驚異の建築物篇―　太田出版
松田陽・岡村勝行 2012『入門パブリック・アーケオロジー』同成社
松本直子・中園聡・川口香奈絵 1999「フェミニズムとジェンダー考古学―基本的枠組み・現状と課題―」『HOMINIDS』第 2 号　Congress of Reconstructing Archaeology
望月昭秀（縄文 ZINE）編 2023『土偶を読むを読む』文学通信
森下　衛 2025「戦後日本のミステリー状況に関する考察―「ファラオの呪い」モチーフの取り扱いに着目して―」『創価人間学論集』第 19 号　創価大学人間学会

（京都大学大学院文学研究科教授）

Female Archaeologists in Fiction

by

Hitoshi Shimogaki

This paper examines female characters engaged in archaeological activities in fiction, as well as its traits and social background. The paper analyzes approximately 1,000 female archaeologists depicted in Japanese fictions, including translated works, and investigates the relationship between their characteristics and actual archaeological activities from the perspective of public archaeology. Though the number of female archaeologists in fictional works have been increased significantly since the 1980s, it turns out through detailed analysis that persons with youth and beauty constitute the majority of women who actually play major roles, and that the majority of the total number of archaeologists including supporting and minor roles are predominantly males. As a result of this, fictional works have been reproduced and reinforced male-dominated image of archaeology. Furthermore, it happens frequently that bizarre theories proposed by young and beautiful female archaeologists within fictional works are accepted by the readers favorably. This is also an problem that shoud not be overlooked in archaeology. Considering these situations, it is necessary to improve the relationship between archaeology and fiction.